

Title	フィニアン運動史研究の諸問題：1858年-1873年
Sub Title	Problems encountered during my study on the history of the Fenian movement : 1858-1873
Author	高神, 信一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1985
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.78, No.1 (1985. 4) ,p.82- 94
JaLC DOI	10.14991/001.19850401-0082
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19850401-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フィニアン運動史研究の諸問題

—1858年～1873年—

高 神 信 一

目 次
はじめに

- I アイルランドとイギリスにおけるフィニアン運動
- II アメリカ合衆国とカナダにおけるフィニアン運動
- III 蜂起・カトリック・急進主義
- IV 結びに代えて

はじめに

現在、いわゆるアイルランド問題は、カトリックとプロテスタントの宗派対立、アイルランドとイギリスとの利害対立を内包しながら頻発するIRAのテロ活動⁽¹⁾に象徴されるように解決が困難となっている。本稿では、現在のIRAに少なからぬ影響を与え、かつてMarxの関心をアイルランドに向けさせたフィニアン運動を対象とし、それが設立された1858年から自治運

動に参加した1873年までの運動史における諸論点を整理したい。⁽²⁾フィニアンはイギリスからの独立を武力によって達成しようとした秘密組織であり、アイルランドでは、1858年にアイリッシュ・リパブリカン・ブラザーフッド (Irish Republican Brotherhood 以下、IRBと略す) として、また、合衆国では、同年、フィニアン・ブラザーフッド (Fenian Brotherhood 以下、FBと略す) として結成された。周知のごとく、フィニアンを中心とするアイルランド問題は、1860年代後半から1870年代前半にかけて、イギリス労働運動の指導者だけでなく、MarxとEngelsにとっても重大な政治的関心事であった。わが国の研究者の間では、1860年代末のMarxのアイルランド論に注目し、『インド通信』におけるMarx低開発論の一面性を批判しながらも、その後Marxはその一面性を克服していったと説く論者が多数を占めている。⁽³⁾このMarxのアイ

- 注 (1) 松尾太郎『アイルランド問題の史的構造』1980年、論争社、堀越智『北アイルランド紛争の歴史』1983年、論争社、堀越智「北アイルランド問題の意味するもの」青山吉信編『実像のイギリス』1984年、有斐閣。
- (2) 文献リストとしては、Desmond Ryan, 'The Historians and Fenianism', *Irish Committee of Historical Sciences, Bulletin*, no. 79, 1957, Patricia F. Guptill, 'A Popular Bibliography of the Fenian Movement', *Eire-Ireland*, vol. 4, no. 2, 1969, James W. Hurst, 'The Fenians: a bibliography', *Eire-Ireland*, vol. 4, no. 4, 1969. また、第1次資料の紹介として、Breandán MacGiolla Choille, 'Fenian Documents in the State Paper Office', *Irish Historical Studies*, XVI, no. 63, 1969, Seamus Pender, 'Fenian Papers in the Catholic University of America: a preliminary report', *Cork Historical and Archaeological Society Journal*, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82.
- (3) 松尾太郎「マルクスと低開発」東京大学『経済学論集』第49巻第3号, p. 132. Marxのアイルランド論は多くの研究者が扱っている。飯田鼎『マルクス主義における革命と改良』御茶の水書房, 1966年, 富次賢治「マルクスと植民地主義」『思想』530号, 1968年, 「マルクスの世界史像にかんする最近の研究」一橋大学『経済研究』第22巻第3号, 1971年, 山之内靖『マルクス, エンゲルスの世界史像』1969年, 未来社, 古賀秀男「アイルランド問題」杉原四郎, 佐藤金三郎編『資本論物語』1975年, 有斐閣, 本多三郎「民族問題の経済学」『講座現代経済学 I』1978年, 青木書店, 毛利健三『自由貿易帝国主義』1978年, 東京大学出版会, 森田桐郎, 「資本主義と低開発」『マルクス, 著作と思想』1982年, 有斐閣, 本山美彦「マルクスと第三世界」『経済評論』1983年4月, Ralph Fox, *Marx, Engels and*

ランド論の修正は、フィニアン運動を契機としてなされた。⁽⁴⁾このように、Marx に多くの影響を与えたにもかかわらず、わが国にはフィニアン運動の通史が存在しない。⁽⁵⁾そこで本稿はフィニアン運動の概説史を書くための基礎作業でもある。

1865年においては、Marx はフィニアン運動を中心としたアイルランド問題をイギリス人の偽善性を暴露するといった程度にしかみなしていなかった。⁽⁶⁾1866年にフィニアン指導者 James Stephens が第1 インターのニューヨーク大会に参加したときには、Marx は Engels 宛書簡の中で、「われわれの不確かな成功のひとつは、スティーヴンスのヘッドセンターの加入であった。⁽⁷⁾」としているように、フィニアン運動を中心としたアイルランド問題について後にみられるような政治的関心を未だもっていない。1867年11月のフィニアンの「マンチェスターの殉教」(Manchester Martyrs) を契機とし、イギリス労働者階級の指導者がフィニアン運動に関心をもつようになるにしたがって、Marx はアイルランド問題の重要性を認識し、アイルランドのイギリスからの分離の不可避性を考えるようになった。⁽⁹⁾1867年12月13日のフィニアンによるクラークウェル刑務所の爆破事件によって Marx の関心はアイルランド問題から一時離れはしたが、1869年のア

ムネスティ・アソシエーション(Amnesty Association) によるフィニアン囚人の大赦運動によって、再びアイルランドに関心に向け、1869年12月10日付 Engels 宛次のような書簡に代表される見解の修正に達したのであった。⁽¹⁰⁾

「僕が長いあいだ考えてきたことだが、可能なのはアイルランドの体制をイギリスの労働者階級の興隆によってくつがえす、ということなのだ。僕は絶えずこの見解を『ニューヨーク・トリビューン』紙上で主張してきた。より深い研究によって、僕は今ではその反対のことを確信するようになっている。イギリスの労働者階級は、それがアイルランドから免れないうちは、けっしてなにごととも達成しはしないだろう。楨杆はアイルランドに据えられなければならない。そうすれば、アイルランド問題は社会運動一般にとつて非常に重要なのだ。」

1872年6月27日、Marx と Engels はフィニアン囚人救出のために設立されたアムネスティ・アソシエーションの指導的人物でありフィニアンである Joseph Patrick McDonnell を第1 インターの総評議会のメンバーにするように提案し、10月2日に McDonnell はアイルランド担当書記に任命されている。⁽¹¹⁾しかし、1871年のパリ・コミューンの反動によって第1 インタ

Lenin on the Irish Revolution, 1932. T. A. Jackson, 'Marx and Engels on Ireland,' *Labour Monthly*, October 1932-January 1933, H. B. Davis, *Nationalism and Socialism*, 1967 (邦訳『ナショナリズムと社会主義』藤野渉訳, 1969年, 岩波書店), Richard Dixon (ed.), *Ireland and Irish Question*, 1972, Ian Cummins, *Marx, Engels and National Movements*, 1980, Ellen Hazelkorn, 'Capital and Irish Question', *Science & Society* vol. XXIV, no. 3, 1980.

注(4) John Newsinger, "A great blow must be struck in Ireland": Karl Marx and the Fenians", *Race & Class*, vol. XXIV, no. 2, 1982.

(5) 堀越智「アイルランド革命組織の一断面」『エール』第3, 4号, 1974, 75年, 岡安寿子, 「19世紀アイルランドにおけるフィニアン主義の思想—1858~1867—」『お茶の水史学』25号, 1982年。

(6) Marx の Engels 宛, 1865年11月10日付書簡(『マルクス=エンゲルス全集』(以下『ME全集』と略す) 31巻, 大月書店) p. 133.

(7) Marx の Engels 宛, 1866年12月17日付書簡, (『ME全集』31巻) p. 225.

(8) 第Ⅲ章参照。

(9) Marx の Engels 宛, 1867年11月2日付書簡, (『ME全集』31巻) p. 313. Marx は資本論の中でアイルランドを分析し次のように述べている。「アイルランドでの地代の蓄積と同じ足並みでアメリカでのアイルランド人の蓄積が進む。羊と牛に押しつけられたアイルランド人は、大洋の彼方にフィニアン会員として立ち上がる。そして年老いた海の女王に向かって、若い巨大な共和国が威嚇的に、そしてますます威嚇的に、そびえ立ってくるのである。」(K. Marx『資本論』大月書店, 第1巻, p. 930)

(10) Marx の Engels 宛, 1869年12月10日付書簡, (『ME全集』32巻) p. 336, アムネスティ・アソシエーションについては, Patrick Quinlivan & Paul Rose, *The Fenians in England 1865—1867*, 1982, Chapter 11を参照。

(11) Cormac O Grada 'Fenianism and Socialism: Tre Career of Joseph Patrick McDonnell', *Saothair*, no. 1, 1976. また, McDonnell は総評議会のメンバーであったとき, しばしば Engels の家を訪れ, Engels だけでなく Marx, Herman Jung ときわめて親しい関係を結んでいる。Engels は McDonnell が第1 インターに多くのアイルランド人を加入させたことに感謝している。

一が衰退したので、Marx のアイルランド戦略は実行に移されなかった。

Marx はフィニアン運動の特徴として次のような6項目をあげている。

- (1) 社会主義的な、下層階級の運動である。
- (2) カトリックの運動ではない。
- (3) イギリスの議会で代表的指導者はいない。
- (4) 民族性。
- (5) アメリカ、アイルランド、イングランド——三つの活動分野、アメリカの指導的役割。
- (6) 共和主義的。アメリカが共和国だから。」

フィニアン運動史に関しては記憶の誤りがないとはいえないフィニアン指導者の回想録⁽¹⁴⁾、あるいは、指導者の伝記⁽¹⁵⁾が出版されているが、彼らが運動の重要な局面では、多くのばあい投獄されていたので、両者とも完全なものとはいえない。本稿は、これらを補う形での最近の研究を参照しながら運動を概観するとともに、上に紹介した Marx のフィニアン運動理解が正しかったかどうかについて以下明らかにしたい。

第I章 アイルランドとイギリス におけるフィニアン運動

まず、フィニアン成立以前のアイルランド民族運動を略述することからはじめよう⁽¹⁶⁾。1775年にアメリカ独立戦争が始まり、アイルランドのイギリス駐留軍の大半がアメリカへ送られると、アメリカ側に参戦したフランスのアイルランドへの侵略を防ぐために、アイルランド独自の軍隊が必要となった。そこで、Henry Grattan を指導者とするプロテスタント中心の8万人の義勇軍が結成された。この義勇軍を利用して、1782年アイルランド議会は、アメリカでの敗北により動揺していたイギリスからアイルランド議会の自治を獲得

した。1789年のフランス革命は、アイルランドに少なからぬ影響を与え、1791年、Wolf Tone はユナイテッド・アイリッシュメン (United Irishmen) を結成したが、まもなくこの団体は非合法を宣告され、弾圧された。また、義勇軍は武器の提出を命じられ、事実上解体に追いこまれた。しかし、このイギリス政府による弾圧のなかで、1798年、ユナイテッド・アイリッシュメンは蜂起したが、蜂起はいくつかの孤立したものに終わった。そして、1800年かの併合法が成立し、アイルランド議会は廃止されることになったのである。

ユナイテッド・アイリッシュメンの蜂起失敗後、19世紀前半のアイルランド民族運動を指導したのは Daniel O'Connell だった。O'Connell は議会主義的方法によるカトリック解放と併合撤廃とを求める運動の推進者であった。1823年、O'Connell は困窮するカトリック大衆を組織して、カトリック協会 (Catholic Association) を設立し、カトリック解放に向けての運動を開始し、1829年イギリスからカトリック解放令を獲得するのに成功した。つづいて、彼はイギリスとの併合撤廃に向けて、リピール協会 (Repeal Association) を設立し、大規模な大衆集会を背景に合法的な議会活動による併合撤廃を達成しようとした。この時期に O'Connell の運動とともに看過できないのは、1842年に『ネイション』(Nation) を創刊した青年アイルランド党 (Young Ireland) の運動であった。この運動は、アイルランド人は信条、人種、階級を越えて統一されなければならないとする Thomas Davis⁽¹⁷⁾、アイルランド議会党がどのような責任をもって下院で機能を果たすかについての戦術理論を考えた Charles Gavan Duffy、アイルランド独立のための武力闘争を主張した John Mitchel⁽¹⁸⁾、土地問題の重要性を唱えた James Fintan Lalor を中心メンバーとしていた。

1846年から47年にかけてのアイルランドのポテト飢

注 (12) K. Marx 「アイルランド問題についてのおこなわれなかった演説の下書き」(『ME全集』訳、16巻) p. 435.

(13) 本稿では普通「イギリス」は「連合王国」のことを示すが、アイルランドとの対比では「イングランド」を示す。

(14) John O'Leary, *Recollections of Fenians and Fenianism*, 1896, Joseph Denieffe, *Irish Revolutionary Brotherhood* 1906, John Devoy, *Recollections of an Irish Rebel* 1929.

(15) Marcus Bourke, *John O'Leary—A Study in Irish Separation*, 1967. Desmond Ryan, *The Fenian Chief* 1967, R. V. Comeford, *Charles J. Kickham*, 1979.

(16) T. W. Moody & F. X. Martin (ed.), *The Course of Irish History*, 1967 (邦訳『アイルランドの風土と歴史』堀越智監訳、1982年、論創社), J. C. Becket, *A Short History of Ireland*, 1966 (邦訳『アイルランド史』藤森一明、高橋裕之訳、1972年、八潮出版), 堀越智『アイルランド民族運動の歴史』1979年、三省堂。

(17) D. George Boyce, *Nationalism in Ireland*, 1982, p. 156.

(18) *Ibid.*, p. 172.

鐘は民族運動に大きな影響を与えた。1851年のアイルランドの人口は650万で、1845年の推定より200万の減少を示していた。そのうち100万人はアメリカなどへの移民によるものであり、残りの100万人は死亡によるものであった。⁽¹⁹⁾ この社会的経済的破局によって、O'Connellが1820年以来築きあげてきた併合撤廃のための運動組織が衰微した。アイルランド人の多くにとってはまさに、餓死とパニックによって独立どころではなくなったのである。⁽²⁰⁾

しかし、このような状況にあっても民族運動の指導者たちは、イギリスからの独立の試みを止めようとしなかった。1848年、フランスに革命が起ると、その影響を受けてSmith O'Brienに率いられた青年アイルランド党が蜂起したが、直ちに鎮圧された。この蜂起には後にフィニアン指導者となるJames StephensやJohn O'Mahonyが参加している。青年アイルランド党の蜂起失敗からフィニアンの成立までの民族運動は、Charles Gavan Duffyによるアイルランド小作権同盟(Tenant League)あるいは、独立アイルランド党(Independent Irish Party)⁽²¹⁾といった合法的運動が中心である。しかし、アイルランド人たちは、この時期の運動によって、合法的運動からは何ら良い結果は得られないと確信するに至った。⁽²²⁾

Fintan Lalorの死後、アイルランドにおいては革命組織は姿を消し、組織設立の中心はニューヨークのアイルランド人コミュニティに移った。1855年、Joseph Denieffeは青年アイルランド党の蜂起に参加したMichael Dohenyの援助のもとに、革命組織を

作るために合衆国からアイルランドへ渡った。Denieffeは、若者たちを集め軍事教練を行っていたPeter Langanと出会い、ともに革命組織設立を探ったところ、1856年初め、亡命先のパリから戻ったStephensが接近してきた。そして、1858年3月17日、Stephensを中心として前記のIRBが設立されたのである。⁽²³⁾

この組織は、アイルランド南部において文学歴史研究のための協会として設立されたフェニックス・ソサエティ(Phoenix Society)を吸収することによって運動を拡大し、さらに秘密組織として活動していたリボン・ソサエティ(Ribbon Society)⁽²⁴⁾を吸収し発展していった。例えば、アイルランド北部のMonaghan州では、James Blayney Riceがリボン・ソサエティのメンバーをフィニアンにすることに成功している。⁽²⁵⁾ そして、1861年11月に行なわれた、青年アイルランド党の指導者であったTerence Bellew McManusの葬儀から、フィニアン運動は急速に発展する。フィニアンの宣誓のもとに、Leinster, Munster Connacht, Ulsterというアイルランドの4つの地方ごとに新しいフィニアンのサークルが組織された。軍事教練、資金調達のためのバザーが開かれ、武器も輸入された。⁽²⁶⁾

一方、イギリスでは1862年9月と10月にイタリア統一の推進者であったGaribaldiの支持者たちと、Garibaldiと対立するローマ教皇を支持するアイルランド人カトリックの間に暴動が生じた。9月28日、ロンドンのハイド・パークでワーキングメンズ・ガリバルディアン・コミッティー(Workingmen's Garibaldian Committee)による1万人から2万人の集会が開かれ

注(19) 堀越智監訳、『アイルランドの風土と歴史』p.305.

(20) D. George Boyce, op. cit., p.171.

(21) 詳しくは、J. H. Whyte, *the Independent Irish Party, 1850~9, 1958*を参照されたい。

(22) D. George Boyce, op. cit., p.176.

(23) E. R. R. Green, 'The Fenians', *History Today*, VIII, October, 1958, pp.700~1, 'The Beginnings of Fenianism', T. W. Moody (ed.) *The Fenian Movement*, 1968, pp.15~17.

(24) Frank Hugh O'Donnell, 'Fenianism—Past and Present', *Contemporary Review*, XLIII, May 1883, p.753, フェニックス・ソサエティについてはSeán Ó Lúing, 'The Phoenix Society in Kerry, 1858~9', *Kerry Archaeological and Historical Society, Journal*, vol.2, 1969.

(25) Seán Ó Lúing, 'A Contribution to a Study of Fenianism in Breifne', *Breifne*, iii, no.10.

(26) Breandán MacGiolla Choille, 'The Fenians, Rice and Ribbonmen in County Monaghan 1864—67', *Closher Record*, vi, no.2, 1967. リボン・ソサエティについてはTom Garvin, 'Defenders, Ribbonmen and Others: underground political networks in pre-famine Ireland', *Past and Present*, no.96, 1982, M. R. Beams, 'The Ribbon Societies: Lower-Class Nationalism in Pre-famine Ireland', *Past and Present*, no.97, 1982.

(27) Anonymous, 'Fenianism, A Narrative By One Who Knows', *Contemporary Review*, XIX, February~April, 1872, pp.304—305.

(28) Sheridan Gilley, 'The Garibaldi Riots of 1862', *The Historical Journal*, XVI, 4, 1973.

たとき、千人のアイランド人がこれを襲った。さらに、1週間後の10月5日、1万人がハイド・パークで Garibaldi 支持の集会を開いたときに、再び約200人のアイランド人が襲った。これらの暴動は、フィニアン⁽²⁹⁾の偽装組織であるナショナル・ブラザーフッド・オブ・セントパトリック(National Brotherhood of St. Patrick)の仕業であると、アイランド人プロテスタント、Edward Harper⁽³⁰⁾は強く主張した。この暴動は、イギリスにおけるアイランド人の位置を根底的に変化させ、ナショナル・ブラザーフッド・オブ・セントパトリックのロンドン支部数を2倍にした。⁽³¹⁾

しかし、Stephens はこれらの成功を有利に利用することに失敗し、1863年までに資金および武器の不足が顕在化する。これを克服するために、Stephens は John O'Leary⁽³²⁾らと『アイリッシュ・ピープル』(*Irish People*)を創刊した。最初この新聞は Stephens を中心としていたが、3週間後に O'Leary が責任をもつものとなった。O'Leary は前に紹介した Davis の『ネイション』⁽³³⁾をモデルとし、武力反乱を主張し A. M. Sullivan と T. D. Sullivan⁽³⁴⁾らの穏健派ナショナリストと対立した。また、フィニアンを反カトリックとして非難する Cullen 大司教に応え、アイランド古来のカルチャーを奨励した。移民にも反対しテナント・ファーマーを結束させたことは、10年後の土地同盟(Land League)⁽³⁵⁾への道を開いたともいわれている。

第II章 アメリカ合衆国とカナダ におけるフィニアン運動

前述した FB は、アイランドの IRB を政治、軍

事、財政的に援助するために合衆国に在住するアイランド人⁽³⁶⁾の間で設立された組織である。1858年のニューヨークで開かれた集会で O'Mahony が当時40人ほどのメンバーを擁していた FB の代表に選ばれた。⁽³⁵⁾彼は合衆国のアイランド人を組織し、アイランドにおけるイギリス支配を転覆することに活動を集中した。最初、組織はニューヨークに限定されていたが、他の地域に拡大していった。その間アイランドで活動していた Stephens は IRB の資金を作るために O'Leary を合衆国へ送った。O'Leary はアイランド人移民の集会で協力を求める演説をし、さらに、O'Mahony、Michael Doheny、John Mitchell⁽³⁷⁾らの著名な合衆国のアイランド人ナショナリストと接触し、資金援助を求めた。⁽³⁸⁾1863年11月のシカゴの FB の代表者会議で、合衆国の憲法と類似したフィニアン⁽³⁹⁾の組織綱領のもとでヘッド・センターに O'Mahony が選出され、Stephens は、ヨーロッパ代表兼アイランドの組織者に格を落された。⁽³⁷⁾1864年3月には、組織の資金を獲得するためにフィニアン・ファンシー・フェア(Fenian Fancy Fair)という大バザールが開かれる。その販売額は5万5千ドルに達したという。⁽³⁸⁾

1861年に南北戦争が始まるまでは、アメリカ人にとってフィニアン⁽³⁹⁾の行動は敵意あるいは無関心をもって受けとめられていた。しかし、アイランド人が軍隊へ参加したことから、イギリス政府への敵意が生じてきたことから、アメリカ人は逆にフィニアンに共感を持つようになった。さらに、民主党と共和党急進派がアイランド系アメリカ人の投票を獲得しようとアイランドの独立を支持したために、⁽³⁹⁾フィニアンは自由に組織を拡大することが可能であった。また合衆国政府

注 (29) *Daily News*, October 22 1862, quoted in Sheridan Gilley, *ibid.*, p. 728.

(30) *Universal News*, October 18 1862, quoted in Sheridan Gilley, *ibid.*, p. 730.

(31) ブラザーフッド・オブ・セントパトリックはイギリス軍によるアイランド人の多くをメンバーにした。(E. R. R. Green, 'The Fenians' *op. cit.*, p. 702) 1867年2月においてイギリス海軍58,324人中14.38%がカトリック教徒であり、この大部分がアイランド人であったと推測できる。Stephens⁽³⁹⁾らはイギリス海軍内の反乱を考えてはいなかった。(John De Courcy Ireland, 'A Preliminary Study of the Fenians and the Sea', *Eire-Ireland*, vol. 2 no. 2, 1967, p. 41.

(32) Marcus Bourke, 'John O'Leary's Place in the Fenian Movement', *North Munster Antiquarian Journal*, 10, 1966—67, p. 150.

(33) Malcolm Brown, 'Fenianism and Irish Poetry', *University Review*, vol. IV, no. 3, p. 243.

(34) Marcus Bourke, *op. cit.*, p. 151.

(35) Anonymous, 'Fenianism, A Narrative By One Who Knows', *op. cit.*, p. 303.

(36) Marcus Bourke, *op. cit.*, p. 150.

(37) E. R. R. Green, 'The Fenians', *op. cit.*, p. 702.

(38) Anonymous, 'Fenianism, A Narrative By One Who Knows', *op. cit.*, p. 307.

に大きな影響力を持っていた Bernard D. Killian は、アイルランドのフィニアンが戦争行為を宣言したばあいには、合衆国はアイルランドを交戦国として認め艦隊を派遣するという大統領の約束を取りつけていた。⁽⁴⁰⁾

このような状況において、1865年に南北戦争が終結すると、北軍だけで15万人のアイルランド人兵が除隊し、彼らの中から多数が、アイルランドにおける蜂起に参加することができた。⁽⁴¹⁾そこで、ヘッド・センターとともに最高権力を分与されていた中央協議会は、1865年8月5日に蜂起のための最終召集を出した。こうしてアイルランドでの蜂起の準備が急速に進められていった。このような動向を見てイギリス政府はアイルランドにおける蜂起の可能性を察知し、フィニアン運動を弾圧する方針を決定した。9月16日イギリス政府は『アイリッシュ・ピープル』の事務所を急襲し、⁽⁴²⁾多数のフィニアン指導者を逮捕した。また、銀行に預託されていたフィニアンの資金700ポンドは政府に没収された。⁽⁴³⁾

アイルランドでの逮捕の知らせは、合衆国のフィニアン指導者に動揺をひきおこした。同年10月16日のフィラデルフィアの代表者会議では、O'Mahony が活動を起こさないことに批判が集中し、今までの組織綱領を修正し中央協議会とヘッド・センターを廃止することが決定され、O'Mahony の FB における地位は低下した。そして、新たに15人からなる上院 (Senate) が結成された。⁽⁴⁴⁾上院のメンバーは即時行動することを主張した。1865年12月2日、上院派は O'Mahony に代えて William Randall Roberts を FB の代表に選んだ。⁽⁴⁵⁾一方、O'Mahony は1866年1月3日ニューヨークで代表者会議を召集し、再びヘッド・センターと

なった。ここに O'Mahony 派と上院派の対立は決定的なものとなっていった。⁽⁴⁶⁾

1866年4月、O'Mahony 派はカナダの Campo Bello Island を占領しようとした。この計画の目的はアイルランドへの進攻のための、あるいはイギリス商船の掠奪のための軍隊を、この島で組織することであった。彼らは Marine の Eastport に赴いたが、⁽⁴⁷⁾計画は失敗した。この失敗により、カナダを進攻することによりイギリスに打撃を与えようとする上院派への支持が上昇した。同年5月31日、上院派の John O'Neill 大佐が800人のフィニアンを率いてナイアガラを渡ってカナダに入り、Fort Erie の村を占拠した。⁽⁴⁸⁾しかし、6月2日 Ridgeway の村の近くで彼らは Wolseley 将軍に率いられたカナダの志願兵に敗北した。⁽⁴⁹⁾そして6月3日、中立法を遵守するために送られた合衆国陸軍の Meade 将軍により、O'Neill 大佐らは逮捕された。さらに、6月6日、Johnson 大統領はイギリス大使の烈しい抗議に促されてフィニアン運動を禁止する宣言を出し、Meade 将軍が上院派の指導者 Sweeny を逮捕した。ここにカナダ進攻計画は崩壊した。⁽⁵⁰⁾これ以後、合衆国におけるフィニアン運動への一般的支持は減少し、Sweeny, Roberts ともフィニアン運動への関心を失っていったのであった。

その後も再度カナダへの進攻計画が練られる。1868年1月1日、上院派のヘッドとなった O'Neill 大佐は新たなカナダへの進攻を計画し、1870年5月25日、彼らはカナダへ St. Alban's から入ったがすぐに撃退され、計画は再び失敗に終わった。さらに、同年10月3日にも三度カナダへの進攻が試みられたが、これも失敗に終わった。⁽⁵¹⁾

注 (39) Arthur Mitchell, 'The Fenian Movement in America', *Eire-Ireland*, vol. 2, no. 4, 1967, p. 8.

(40) Anonymous, 'The Fenian Brotherhood', *Blackwood's Magazine*, CLXC, 1911, p. 391.

(41) E. R. R. Green, 'The Fenians', op. cit., p. 702.

(42) Anonymous, 'Fenianism, A Narrative By One Who Knows', op. cit., p. 308.

(43) Anonymous, 'The Fenian Brotherhood', op. cit., p. 389.

(44) William D'Arcy, *The Fenian Movement in the United States: 1858—1886*, 1947, pp. 79—81.

(45) Breandán Ó Cathaoir, 'American Fenianism and Canada 1865—1871', *Irish Sword*, vol. 8, no. 31, 1967, p. 79.

(46) Anonymous, 'Fenianism, A Narrative By One Who Knows', op. cit., p. 392.

(47) John De Courcy Ireland, op. cit., p. 45.

(48) Arthur Mitchell, op. cit., p. 9.

(49) G. C. Duggan, 'The Fenians in Canada', *Irish Sword*, vol. 8, no. 31, 1967, p. 89.

(50) Brendan Ó Cathaoir, op. cit., p. 81. この戦闘でカナダ側に12人の死亡者と40人の負傷者、フィニアン側に8人の死亡者と20人の負傷者を出した。

(51) Ibid., pp. 84—85.

第三章 蜂起・カトリック・急進主義

1867年、アイルランドでフィニアンは二度にわたって蜂起した。2月12、13日には、アイルランド南部の Kerry 州のみに蜂起が生じ、3月5、6日にはより広範な地域で蜂起が生じたが、治安が著しく乱れたのは、Dublin, Cork, Tipperary, Limerick, Clare, Queen, Louth などの諸州だけであり、Connacht 地方では蜂起が起こらず、Ulster 地方では蜂起の計画さえなかった。

2月12、13日の Kerry 州の蜂起は15時間しか続かなかった短命なもので、John James O'Connor 大佐を指導者とするフィニアンが Kells の沿岸警備隊のステーションを攻撃し少量の武器を奪っただけで終わり、Killarney, Killorglin では計画されていた蜂起が起きなかった。2月14日、軍隊が Killarney に到着し、フィニアンが隠れたといわれた Tomies Wood に行ったが、彼らを発見することはできなかった。その後まもなく軍隊は他の地域でおこる可能性のあったフィニアン蜂起のために、Kerry 州から撤退していった。住民はフィニアンに共感を持っていたために、フィニアンを逮捕しようとした Kerry の警察署長は敵意をもってみられていた。

3月5、6日のフィニアン蜂起について、本稿では Limerick 州 Kilmallock の警察バラック襲撃についてのみ取り扱いたい。Limerick 州では Kilmallock

だけでなく、Adragh, Kiltteely でもフィニアンは警察バラックを襲撃したが、Kilmallock のものが最大であった。3月5日の夜から6日にかけて Kilmallock の警察バラックを、銃を持っている者もわずかはいたが多くはつるはしを持ったフィニアンが襲撃した。しかしながら、警官が銃による反撃を開始したために、フィニアンは形勢が不利と考え撤退したのである。

フィニアン襲撃後、Kilmallock 警察への増援隊が次から次へと到着した。3月7日付の『リメリック・クロニクル』(Limerick Chronicle)によると、リスベクタブルな階級は増援隊の到着を喜んだが、下層階級は敵意をもって迎えたとしている。また、3月16日付の『ウィークリー・ニュース』(Weekly News)によると、襲撃の間、町の人々はフィニアンと親しく交わっていたとしている。3月6日の午後までに約100人の武装警官が20人のフィニアンを逮捕し、裁判のための特別委員会が設立された。

次に、アイルランドのフィニアン蜂起が合衆国のフィニアンに与えた影響をみてみよう。ニューヨークでは、すぐに蜂起に共感を示す1万人以上が参加した集会が開かれた。そして、蜂起をおこしたアイルランド人を援助する遠征が組織され、4月13日、John F. Kavanagh によって指揮された9名のクルーと、34名の義勇兵を乗せた115トンのブリガンティン型帆船エリンズ・ホープ(Erin's Hope)が、アイルランドへ向けてニューヨークを出発した。6月1日、31人がアイルランドの Helvick Head に上陸したが、まもなく警

注 (52) Seán Ó Lúing, 'Aspects of the Fenian Rising in Kerry, 1867', *Journal of Kerry Archaeological and Historical Society*, vol. 3, 1970, vol. 4, 1971, vol. 5, 1972, vol. 6 1973, vol. 7, 1974.

(53) Anonymous, 'Fenianism, A Narrative By One Who Knows', op. cit., p. 629. また、イギリスのアイルランド系アメリカ人は合衆国からの援助なしに独自の運動を進め、the Directory を結成して Chester Castle への攻撃を計画した。1867年2月10日の夕方、McCaffery らは Chester へ到着したが、翌朝厳重な警備のために計画は中止された。(Ibid., p. 626)

(54) Seán Ó Lúing, op. cit., vol. 3, 1970.

(55) Ibid., vol. 4, 1971.

(56) Seán Ó Súilleabháin, 'The Iveragh Fenians in Oral Tradition', *University Review*, vol. IV, no. 3, Winter 1967, p. 226.

(57) Mainchín Seoighe, 'The Fenian Attack on Kilmallock Police Barracks', *North Munster Antiquarian Journal*, 10, 1966—67.

(58) Ibid., pp. 159—163.

(59) Ibid., p. 164.

(60) Ibid., p. 165, Limerick 州の Ardagh では24人、Kilmallock では41人、Kiltteely では7人のフィニアンが逮捕された。(Edward Keane, 'Active Fenians in Co. Limerick as Listed in the Crown Solicitor's Brief', *North Munster Antiquarian Journal*, 10, 1966—67)

(61) Anonymous, 'Fenianism, A Narrative By One Who Knows', op. cit., p. 634.

察に逮捕された。⁽⁶²⁾

次に、アイルランドにおけるフィアン蜂起と IRB と FB の関係をみてみよう。1866年5月10日、Stephens は合衆国に到着し、O'Mahony に代わり FB のヘッド・センターになった。そして、Stephens は Thomas J. Kelly を副官に、Gustave Paul Cluseret⁽⁶³⁾ をアイルランドの軍事組織の最高司令官に選んだ。1866年10月28日のフィアンの集会で、この年に行なうはずであったアイルランドにおける蜂起に対して、Stephens が延期を申し入れた。この申し出は烈しい反対を呼び起こし、Stephens は FB の軍事的指導者の地位を追われる。そして、同年12月には、Kelly が Stephens に代わり FB の最高責任者となる。

Kelly はアイルランドでの蜂起を実施するために行動をおこした。1867年1月末までにアイルランド系アメリカ人将校の大部分がロンドンへ行った。1867年2月10日、ロンドンで Kelly を中心とし4人の IRB の各地方の代表 Edward Duffy, William Harbison, Edward O'Byrne, Dominick Mahony を含んだ臨時政府が樹立された。そして、3月5日にフィアンが蜂起することが決定されたのであった。⁽⁶⁴⁾

フィアン蜂起の失敗の要因は、一般的には、FB 内の分裂によるアイルランドへの資金、武器の供給不足、指導者の不在、John Joseph Corydon のようなスパイの活躍、天候の異常な悪さなどがあげられている。しかし、これらの要因だけでは多くの問題が解かれない。これらの要因の他に、フィアンの最高司令官代理でありながらイギリスのスパイであった Godfrey Massey が、当初計画された蜂起計画が実行に移されないように活躍したことに注目しなければならない。⁽⁶⁵⁾ フィアン蜂起は失敗したが、蜂起は Gladstone

をはじめ、多くのイギリス自由主義者をアイルランドでの改革や変革を行なう方向に向けたのであった。⁽⁶⁶⁾

最後に、蜂起後のフィアン運動について付言しておこう。IRB はアイルランドにおけるフィアンの意思決定機関として最高評議会 (supreme council) を設立し、1869年4月24日、アイルランド人に向けてのメッセージを発表した。そして、1869年8月18日、最高評議会は設立後初めて公式的な組織綱領を発表した。その後、IRB は1873年11月、Isaac Butt の率いる自治同盟に参加することになる。⁽⁶⁷⁾

IRB の指導者は、政治に関する聖職者の権威を打ち砕くべきだと考えていた。⁽⁶⁸⁾ 一方、カトリック教会はフィアン運動の開始直後から、Cullen 大司教や Kerry の Moriarty 司教の指導のもとにフィアンを批判していた。⁽⁶⁹⁾ その批判の論点は、次のようなものであった。第1に、武力によって合法的政府を転覆させることは罪悪である。第2に、宗教家でない見知らぬ者に盲従することは誤りである。第3に、『アイリッシュ・ピープル』は社会主義を説き、すべての教会の権威を軽視するものである。第4に、フィアン運動はアイルランドを流血の破滅に導く希望のない試みである。Cullen 大司教はフィアン指導者を Mazzini, Garibaldi, カルボナリ党、フリーメーソン、国際的社会主義者と同じものだとみなしていたのである。教会はフィアンに反対し彼らの活動を非難したと考えられているが、果たして100年以上前に27人の司教と3千人以上の司祭すべてが、フィアンのような複雑な問題に一致した意見を持っていたのだろうか。

アイルランドのカトリック教会とフィアン指導者との最初の衝突は、1861年11月の、青年アイルランド党の指導者であった McManus の葬儀をめぐる生

注 (62) John De Courcy Ireland, op. cit., pp. 45—48. Erin's Hope については O'Donovan Rossa, *Irish Rebels in English Prisons*, 1882, pp. 302—3, Joseph Denieffe, op. cit., pp. 208—11, *London Times*, August 21, 1867, *Illustrated London News*, June 6, 1867.

(63) Peter Nolan, 'Fariola, Massey and the Fenian Rising', *Journal of the Cork Historical and Archaeological Society*, vol. LXXV, no. 221, 1970, pp. 2—3.

(64) *Ibid.*, p. 4.

(65) *Ibid.*, pp. 5—11.

(66) K. B. Nowlan, 'The Fenian Rising of 1867', T. W. Moody (ed.) *The Fenian Movement* 1968, p. 35.

(67) T. W. Moody, Leon O'Broin, 'Select documents XXXII the IRB Supreme Council, 1868—78', *Irish Historical Studies*, vol. XIX, no. 75, 1975, pp. 286—289.

(68) John O'Leary, op. cit., p. 33.

(69) Donal McCartney, 'The Church and Fenianism', *University Review*, vol. IV, no. 3, 1967, p. 205, 1865年10月10日付の Cullen 大司教の教書はフィアンに対するこれらの態度を要約している。

⁽⁷⁰⁾ じた。McManus の遺体が Dublin へ着いたとき、Cullen 大司教は教会に安置することを拒否した。カトリック教会全体としては Cullen 大司教の指導により葬儀に反対したが、聖職者の中には Keane 司教や Kenyon 師や Lavelle 師のように葬儀に共感を示す者がいた。⁽⁷¹⁾ Lavelle 師は、McManus の葬儀のときには演説し、さらに 1862 年 Dublin の Rotundo で「革命の権利に関するカトリックの教義」について講演している。また、彼は前述したブラザーフッド・オブ・セントパトリックの副議長も勤めていた。Lavelle 師の他に、Tuam の MacHale 大司教もフィニアン共感者であり、Clonfert の Derry 司教とともに、Lavelle 師がブラザーフッド・オブ・セントパトリックを辞め公的に謝罪することに反対し、Cullen 大司教とはローマで論争し、1864 年 3 月のシカゴのバザーには自分自身が書いたポートレートを出している。⁽⁷²⁾ 一般的に考えられることは、下位のカトリック聖職者はフィニアンに共感を持っていたかもしれないが、上位の聖職者の命令によってフィニアンを支持することを控えていたことである。また、上位の聖職者の中にもフィニアンを支持していた者がいたが、合法的運動によって自分たちの要求をイギリス政府から獲得できると考えていたために、フィニアン支持を控えていたのである。⁽⁷³⁾

フィニアンの聖職者に対する態度は『アイリッシュ・ピープル』のなかで明確に示されている。すなわち、Kickham は、「政治に聖職者はいらない」(no priests in politics) を繰り返し、聖職者は政治のリーダーシップのどんな形態にも適さないことを示したのである。Kickham らは、神学、道徳、教義についての議論を避け、政治に関する議論をした。⁽⁷⁴⁾ 政治に対する聖職者の関与を拒否するという論理は、フィニアンに対する

反宗教的で反カトリックであるという批判を避ける上で限界のあるものであった。⁽⁷⁵⁾

しかしながら、フィニアンと教会の対立は、「マンチェスターの殉教」やアムネスティ・アソシエーションの大規模なアピールや釈放されたフィニアンの歓迎会によって次第に解消されつつあった。⁽⁷⁶⁾ 「マンチェスターの殉教」とは 3 人のフィニアンが処刑された事件であった。マンチェスターで開かれる予定の代表者会議に出席するためにイギリスへ渡った Kelly と Deasy は、1867 年 9 月 11 日、路上で逮捕された。一週間後の 18 日、フィニアンは 2 人の救出には成功したが、Charles Brett 巡査部長を殺害した。この容疑のために逮捕された Allen, Larkin O'Brien が同年 11 月 23 日死刑に処せられた。⁽⁷⁷⁾ この処刑は多くの人々にフィニアンに対する共感を引き起こした。3 人の処刑に対する最初の抗議行動は、同年 12 月 1 日のマンチェスターや Cork City や Bandon での葬儀の形を模倣した行進であった。12 月 8 日には、Limerick で 3 人のための葬儀行進が行なわれた。1 時にメカニックス・インスティテュートを出発した行進は 6 頭の馬に引かれた葬儀馬車を先頭とし、700 人の女性、300 人から 400 人の男子学生、100 人の若者、さらに樽製造人、石工、大工などの集団がつづき、行進は 1 マイルに及んでいる。⁽⁷⁸⁾ また、Killarney, Tralee でも、行進が計画されたが実行されなかった。⁽⁷⁹⁾

フィニアンと聖職者が接近したことを示す事実をその後も見いだすことができる。1869 年初め、Cork で釈放されたフィニアン囚人のための歓迎会に Lavelle 師と Anderson 師が参加し、この年の終わりにはアムネスティの運動がいくつかの教区で聖職者の支持を獲得し、Tuam, Meath, Ferns でフィニアン囚人の釈放を要求する聖職者の集會が開かれた。⁽⁸⁰⁾ 1870 年初め

注 (70) Tomás Ó Fiaich, 'The Clergy and Fenianism, 1860—1870', *Irish Ecclesiastic Record*, 109, 1968, p. 82.

(71) John Newsinger, 'Revolution and Catholicism in Ireland 1848—1923', *European Studies Review*, vol. 9, no. 4, 1979, p. 471.

(72) Donal McCartney, op. cit., pp. 207—8.

(73) Cornelius O'Dowd, 'Fenians', *Blackwood's Magazine*, CI 1867, p. 60.

(74) Donal McCartney, op. cit., pp. 211—12.

(75) John Newsinger, op. cit., pp. 471—2.

(76) Donal McCartney, op. cit., p. 213.

(77) Robert J. Bateman, 'Captain Timothy Deasy, Fenian', *Irish Sword*, vol. 8, no. 3, 1967, pp. 135—6. 詳しくは Paul Rose, *The Manchester Martyrs*, 1970.

(78) Breandán MacGiolla Choille, 'Mourning the Martyrs, A Study of a Demonstration in Limerick City 8.12.1867', *North Munster Antiquarian Journal*, 10, 1966—67.

(79) Seán Ó Lúing, op. cit., vol. 7, 1974, pp. 116—8.

の『フリーマンズ・ジャーナル』(Freeman's Journal)は、アイルランドの聖職者の約半数にのぼる1,400人がフィニアン囚人釈放のために署名したと伝えている⁽⁸¹⁾。

フィニアンに対する聖職者の共感が高まっていた1869年から70年の冬に開かれたヴァティカン公会議に参加したアイルランド人司教のもとに、Lavelle 師と Ryan 師がフィニアンに共感した革命的声明を出したとの報告が届いた。この報告は、1869年12月23日、28日、ローマのアイルランド人司教たちによって討議された。その結果、布教聖省に教皇がフィニアン運動を批判するように要求することを決定した。これを受けて、教皇は1870年1月12日付で「フィニアンと呼ばれる、アメリカ、アイルランドの団体は教皇の保有する正式破門を受けなければならない。」という教令を出したのであった⁽⁸²⁾。

Stephens は、フィニアンとイギリス急進主義者、あるいは大陸の革命家たちとの同盟を不可欠なものと考えていたが、Thomas Clark Luby らが反対していたので、運動が分裂することを避けるために、初めは左翼的意見を控えていた⁽⁸³⁾。しかし、フィニアンの力だけでは独立を達成することが不可能であることが明らかになるにつれて、イギリス急進主義者に協力を求めるようになった。

最初に、フィニアンと選挙法改正連盟(Reform League)の関係をみてみよう⁽⁸⁴⁾。1860年代イギリス労働者階級が男子普通選挙権や秘密投票等を要求し、労働者階級の政治的権利の問題が大問題として提起されたとき、選挙法改正連盟がその運動の中心であった。1866年初めの数か月間のラッセル・グラッドストンの選挙法改正案が議会で審議されたときには、イギリスではこれに対する議論は少しもおきなかった。しかし、法案の内容が知れわたると、選挙法改正連盟を中心とした数か月にわたる激しい煽動活動が始まった。1866年

7月初めのトラファルガア広場での大示威行動につき、選挙法改正連盟はハイド・パークで集会を開こうとした。「ハイド・パークへの入園を要求し、拒否された連盟会長 Edmond Beales は彼に近い追従者や支持者を連れて(トラファルガア)広場に向かった。(しかし)このことや、警察が正装し、上品な言葉を使う人々の入園を許した恣意的なやり方に恐らく激怒した群衆は、破損していた棚を打ち倒し、三日三晩断続的ではあったが小ぜりあいがつづいた。」その後、再び選挙法改正連盟の指導者が、1867年5月6日にハイド・パークで集会を開こうとしたとき、政府は5月1日付で集会を禁止する声明書を出した。それにもかかわらず、5月6日「午後6時頃選挙法改正連盟のクラークンウェル支部が自由の帽子を上のにせた赤旗を持ってパークの中に現われた。30分後、公園には1万ないし1万5千の人が集まった。連盟の指導者は大きな喝采のうちに入園し、10を下回らない別々の演壇から群衆に向かって演説し始めた。」⁽⁸⁵⁾このハイド・パークでの集会の成功によって、選挙法改正連盟は Disraeli に、選挙権を「原案より殆ど4倍」拡大した修正案を受け入れさせることに成功したのであった。

フィニアンが選挙法改正連盟の指導者に同盟を申し出た1867年初めを、Royden Harrison は次のように述べている。「1866年の末と翌年の初めにかけて、経済的不況が表面化し、数万人が職を失った。これまで政治的騒動につきものであったコレラも発生した。不景気と同じく、それはロンドンでは特別に苛酷なものに受けとられた。とかくしている中に、Eyre 知事を告訴しようとするジャマイカ委員会の試み、フィニア会の活動、シェフィールドでの『機械打ちこわし』と殺人事件の結果として、漸次的・政治的暴力にたいする関心が著しく高まっていった。支配階級は、一方の側での改正論者と他方の側でのアイルランド人または

注(80) 1869年3月には Butt, Richard Pigott らのアムネスティ運動によって Portland jail から15人、西オーストラリアから34人のフィニアン囚人が解放された。さらに、1870年4月には Gladstone が自治運動内のフィニアン囚人の解放要求の大きさに驚き、フィニアン囚人の扱いに対する新しい調査を開始させたのであった。(John Senan Moynihan, 'Fenian Prisoners in Western Australia', *Eire-Ireland*, vol. 4, no. 2, 1969, p. 11) Gladstone とフィニアンについては、J. L. Hammond, *Gladstone and the Irish Nation*, 1938 を参照されたい。

(81) Tomas Ó Fiaich, op. cit., p. 95.

(82) Ibid., pp. 95-6.

(83) John Newsinger, 'Old Chartists, Fenians and New Socialists', *Eire-Ireland*, vol. 17, no. 2, 1982, p. 23.

(84) R・ハリソン、田口富久監訳『近代イギリス政治と労働運動、1860年～1970年』1976年、未来社、第三章。

(85) 『同上書』, p. 95.

(86) 『同上書』, p. 112.

労働組合主義者とが融合していくのではないかと見て大いに不安を感じ始めた。⁽⁸⁷⁾

1867年初め、Cluseret が選挙法改正連盟の指導者 W. R. Cremer, Robert Hartwell, George Odger らに同盟を申し出たとき、この提案は断わられたが、選挙法改革が行なわれなければ、彼らは「喜んで Cluseret の提案を受け入れよう。」と述べた。⁽⁸⁸⁾ また、このとき George Odger はこれに好意的態度を示したのであった。⁽⁸⁹⁾

1867年5月6日選挙法改正連盟がハイド・パークで集会を開こうとした時期に、フィニアンとの同盟を示唆する新聞記事が、Cremer, Odger, Leno らが編集責任を分担していた『コモンウェルス』(Commonwealth) に現われている。それは、「フィニアン運動はアイルランドに限られるなら、少しもあるいは全く驚きを生じさせない。しかし、イギリスの民主主義者とアイルランドの民主主義者が手を握ったならば、有力な力となるであろう。」という記事であった。⁽⁹⁰⁾

前述した「マンチェスターの殉教」のときには、古きチャーティストであった Ernest Jones や「炭坑夫の検事総長」とよばれた W. P. Roberts⁽⁹¹⁾ による弁護委員会が設立され、イギリス急進主義者がフィニアン運動に接近するとともに、フィニアン運動に対する支持の問題が選挙法改正連盟の執行部の戦闘派と穏健派の主要な論争点の1つになった。⁽⁹²⁾ 1867年10月、選挙法改正連盟の総評議会で議長 Beales のフィニアン運動を批判する手紙が問題にされたとき、後に TUC の議会対策委員会の書記となった George Howell は、

この手紙を公開することに反対した。Odger は自分がアイルランド人であったらフィニアンになったであろうと宣言し、Benjamin Lucraft はフィニアンの権利を守るためには暴力の使用を辞さないと述べている。⁽⁹³⁾ しかし、最終的には、選挙法改正連盟はフィニアン囚人に対する温情ある処置(clemency)を要求することを認めたものの、政治的目的を持つ秘密組織とは関係をもたないことを決定した。⁽⁹⁴⁾

しかしながら、選挙法改正連盟のフィニアン運動への共感は、1867年12月13日のフィニアンによるクラークケンウェルの爆破事件によって消え去った。囚人を救出するために刑務所の壁に穴をあけるための爆破であったが、結果的には刑務所の大部分の壁、そして反対側の家々までも破壊し、12人を殺し多くの人々に重傷を負わせたのである。『スペクテイター』(Spectator)、『ニューカッスル・デイリー・クロニクル』(Newcastle Daily Chronicle) といった多少ともアイルランドに共感を持っていた新聞も、この事件を契機に反対へまわった。⁽⁹⁵⁾ そして、アイルランド独立を支持していた急進主義者たちは孤立し、選挙法改正連盟は自由党の支配下に入ったのである。⁽⁹⁶⁾

ここで、無宗教主義者であった Charles Bradlaugh との関係についてみると、1865年、フィニアンはイギリス急進主義者の援助を得るために、Frank Roney を Bradlaugh のもとに送っている。⁽⁹⁷⁾ さらに、1867年3月5日に予定した蜂起以前に、Kelly と Cluseret はイギリスで公表するつもりであったアイルランド共和国宣言に関する意見を聞くために Bradlaugh

注 (87) 『同上書』, p. 99.

(88) Howard Evans, *Sir Randal Cremer*, 1909, pp. 406—7.

(89) John Beford Leno, *The Aftermath*, 1892, p. 71.

(90) *Commonwealth*, April 27 1867, quoted in John Newsinger, op. cit., p. 37.

(91) 彼は1867年には、フィニアン会の囚人を救出しようとして、一警察官を殺した罪で絞首刑にされたアイルランド人の「マンチェスターの殉教者たち」(Manchester Martyrs)、アレン(Allen)ラーキン(Larkin)、およびオブライエン(O'Brien)の弁護を組織した。(S. & B. Webbs, *History of Trade Unionism*, 1920, 飯田鼎・高橋沈訳『労働組合運動の歴史』(上), 1973年, 日本労働協会, p. 210)

(92) この時期の最大の論争点は、選挙法改正連盟が議会へ独立の労働者階級の代表をたてるか、あるいは自由党に従属するかといった問題であった。

(93) *Bee-Hive*, October 26, 1867.

(94) Henry Collins and Chimes Abramsky, *Karl Marx and the British Labour Movement*, 1965, p. 132.

(95) Norman McCord, 'The Fenians and Public Opinion in Great Britain', *University Review*, vol. IV, no. 3, 1967, p. 235.

(96) John Newsinger, "A great blow must be struck in Ireland": Karl Marx and the Fenians", op. cit., pp. 161—2.

(97) Frank Roney, *Frank Roney: Irish Rebel and California Labour Leader*, ed. Ira B. Cross, pp. 117, 119, 121.

を訪ねている。後に Bradlaugh は自分の娘 Hypatia に、宣言の草案は自分で書いたものであるが、印刷されたものには修正箇所があると語っている⁽⁹⁸⁾。この宣言はイギリス労働者階級に向けて書かれたものであり、選挙法改正連盟との同盟の可能性を示していた。また、宣言の「宗教的、カトリック的感情およびアイルランド人を鼓舞する人種的感情」へ訴えるという部分は、Bradlaugh により削除されたことが明らかにされている⁽⁹⁹⁾。

また、議会内にもアイルランド問題に深く関心を持った者がいた。J. Bright は1867年5月、下院でフィニアン囚人に対する慈悲のある特別な扱いをするように求める請願を採択することを提案した。この提案は J. S. Mill, Frederick Harrison, Beesly 教授らによって起草されたものであった⁽¹⁰⁰⁾。

イギリス労働者階級の間ではフィニアン支持者は少数で、経済競争、宗教の違いなどを理由とする反アイルランド人の感情が広くみられた⁽¹⁰¹⁾。しかし、フィニアンを支持する労働者がいなかったわけではない。1867年11月17日、ロンドンでは労働者によるフィニアン囚人の死刑判決を減刑しようとするキャンペーンが始まっている。17日、クラークンウェル・グリーンにおける大規模な労働者集会で、内務省への請願書が作成された。18日午後、約60~80人の労働者代表がホワイト・ホールへ集まったが、内務大臣 Gathorne Hardy は彼らに会うことを拒否した。そこで彼らは建物を占拠し、集会を開いて21日にクラークンウェル・グリーンにおける集会の開催を決定した。21日の集会には主催者側の発表で2万から3万人が集まった。翌22日、女王に請願するために代表者がウインザーへ行ったが、

追い払われている。そして、「マンチェスターの殉教」直後の24日、クラークンウェル・グリーンに集まった葬儀行列がハイド・パークへ行進した⁽¹⁰²⁾。しかし、このロンドンの労働者のフィニアン支持も、クラークンウェル爆破事件によって消滅した。結局、選挙法改正連盟とフィニアンの同盟は成立しなかったが、イギリス急進主義者との同盟の問題は、フィニアン運動の性格を考えるうえで重要な視角を提供するものであろう。

第四章 結びに代えて

最後に、フィニアン運動を前述した Marx による6つの特徴に即して考察してみることとする。

(1) 「社会主義的な、下層階級の運動である」という指摘について。

Marx はフィニアン運動を「土地の横領に反対するものとしての消極的な意味で」⁽¹⁰³⁾ 社会主義的であると理解した。ここではフィニアン運動が社会主義的な運動であったのかどうかについては結論を留保したい。ただフィニアン指導者 Stephens の第1インターへの参加、Marx の第1インター総評議会でのフィニアン支持、Joseph Patrick McDonnell の第1インターのアイルランド担当書記の就任といった事実だけをあげておきたい。Robert Anderson は1860年代のフィニアン運動は、リスベクタブルな賃金労働者、都市の lower-middle class の運動であったことを明らかにしている⁽¹⁰⁴⁾。また、逮捕者の年齢構成を調べてみると、746人の年齢が判明し、平均27歳、36歳以下が87%という結果が得られている⁽¹⁰⁵⁾。

(2) 「カトリックの運動ではない」という指摘について

注 (98) H. B. Bonner, *Charles Bradlaugh: a record of his life and work*, vol. 1, 1902, p. 255. また Bradlaugh とアイルランドについては Nigel H. Sinnott, 'Charles Bradlaugh and Ireland', *Journal of the Cork Historical and Archaeological Society*, vol. 77, no. 225, 1972.

(99) Adolphe S. Headingley, *The Biography of Charles Bradlaugh*, 1880, pp. 209, 213.

(100) Norman McCord, op. cit., p. 237.

(101) Ibid., p. 238.

(102) *Times*, November 18, 19, 20, 22, 23, 25, 1867.

(103) Marx の Engels 宛, 1867年11月30日付書簡 (『ME全集』31巻, p. 335)

(104) イギリス政府は1866年2月、「人身保護律停止法」(Habeus corpus suspension act) を成立させ1866年から68年にかけて1,100人以上のフィニアンを逮捕した。このとき当局は、「人身保護律停止法, 事例の要約, 1866—8」(Habeus corpus suspension act, abstract of cases, 1866—8) を作成し、これにもとづいて Anderson が職業分析を行なった。(Summary of the occupations of the prisoners in custody under the lord lieutenant's warrant, 12 Jan 1870 (State Paper Office, Fenian papers, 5477 R)) 全体の47.8%を熟練工が占めていた。この他には商店員、教師(9.1%)、商店主、パブ店主(8.2%)、ファーマーおよびその息子(55%)、農業労働者(5.3%)。

て。

前述したように、フィニアンを支持した聖職者がカトリック教会には少数ながら存在した。アムネスティ運動によってフィニアン囚人の解放を要求した多数の聖職者がいたが、そのすべてが運動の武力闘争による独立の達成を支持したとは考えられない。そして、ローマ教皇に対してアイルランド人司祭がフィニアンを禁止する教令を出すように請願したことから考えても、カトリック教会はフィニアン運動を弾圧しようとした。したがって、フィニアン運動はカトリック教会による運動ではないことは明らかである。一方、フィニアンはあくまでも政治にカトリック聖職者が介入することを否定しただけであり、カトリックの教義を否定したのではない。また、フィニアンの中には『アイリッシュ・ピープル』で教会からの非難に応じた Kickham のように多数のカトリック教徒がいたことは事実である。したがって、フィニアン運動はカトリック教会の運動ではないが、カトリック教徒の運動であったことは確かであろう。

(3)「イギリス議会に代表的指導者はいない」という指摘について。

イギリス議会にはフィニアンに共感をもった J. Bright がいた。しかし、フィニアン運動は議会主義的方法を認めず武力闘争によるアイルランド独立を目的としたために、議会にフィニアン指導者はいなかった。

(4)「民族性」という指摘について。

フィニアンという名称が、古代ゲールの勇士 Fionn MacCumhail と彼を警護する騎士団 Fianna の伝説からとられたように、フィニアン運動は「ゲール復古主義の性格を堅持し」「民族存立の基盤はゲールの伝統の再興にあるとした⁽¹⁰⁶⁾運動であった。したがって、フィニアン運動はきわめて民族性の濃い運動であった。

(5)「アメリカ、アイルランド、イングランド——3つの活動分野、アメリカの指導的役割」という指摘について。

1858年、フィニアン運動はアイルランドでは IRB、

アメリカ合衆国では FB として成立した。そしてイギリスでは1867年アイルランド臨時政府が樹立され、イギリス急進主義者との同盟が問題にされた。また、カナダでは1866年、1870年に4回の進攻が試みられた。このように、フィニアン運動はアイルランドに限定されることなく、イギリス、合衆国、カナダへの運動の広がりを提示したのであった。なお、合衆国の組織 FB がアイルランド蜂起計画の中で、資金、武器の調達において中心的役割を演じたのは前述したとおりである。

(6)「共和主義的。アメリカが共和国だから。」という指摘について。

1867年の蜂起前に出されたアイルランド共和国宣言には、フィニアンを「国民の労働のすべての本質的価値を保証する、普通選挙権に基づいた共和国を建設する⁽¹⁰⁷⁾」とうたっている。このことから考えてもフィニアン運動が共和主義的運動であったことは明らかであろう。Marx はフィニアン運動に対する合衆国の共和主義の影響を指摘してはいるが、アイルランド固有の共和主義の伝統を見落としているのではないだろうか。なぜならば、アイルランドには1782年の義勇軍に起源を求める共和主義の伝統が存在し、共和主義的青年アイルランド党の運動がフィニアン運動に与えた影響の大きさが明らかであるからだ。かくしてフィニアン運動は、1858年の設立から1916年のイースター蜂起までの60年間にわたって存続した。

〔付記〕

本稿の作成にあたり御指導いただいた法政大学松尾太郎教授、岩見寿子氏に感謝の意を表したい。

(慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程)

注 (105) R. V. Comerford, 'Patriotism as Pastime: the appeal of fenianism in the mid-1860 s', *Irish Historical Studies*, vol. XXII, no. 87, 1981.

(106) 岡安寿子「19世紀アイルランドにおけるフィニアン主義の思想—1858~67」『お茶の水史学』25号(1982)。

(107) H. B. Bonner. op. cit., p. 254.

(108) Hereward Senior, 'The Place of Fenianism in the Irish Republican Tradition', *University Review*, vol. IV, no. 3, 1967.

(109) T. W. Moody, 'The Fenian Movement in Irish History', T. W. Moody (ed.) *The Fenian Movement*, 1968, pp. 110~1.